

# 目覚めると従姉妹を護る 美少女剣士になっていたF

狩野景

挿絵／緑木邑

立ち読み版



# TS Guardian Saves a Cousin!

# Character Profile

登場人物紹介



## ルクシャナ ルー

Lucciano Lugh

異国クルキスタンからの留学生。召喚魔法を得意とする褐色肌の少女で、アリエルになつている。

## アリエル エインズワース

Ariel Ainsworth



性転換

ターンブリッジ魔導学園に通う少年。大魔導士エインズワースの末裔でありながら、魔法力は弱く、学園の成績は常におちこぼれ。

アリエルの性転換した姿。長身で巨乳のナイスバディな美少女。



## パーシー スライ

Percy Prey

アリエルの親友で、回復魔法を得意とする。エッチに興味津々な熱血馬鹿。



## ユリウス バイロン

Julius Byron

アリエルやパーシーと仲の良い、三馬鹿の一人。アリエルに対して同性であるにもかかわらず、妖しい感情を抱いている…?

## セレスティア エインズワース

Celestia Ainsworth

アリエルの従姉妹。大魔導士の再来と期待されるほどの力を操る天才少女。幼馴染みであるアリエルの不甲斐なさな腹を立てている。





「それじゃあたしはセレスティアを追いかけるから。友達だし愚痴聞いてあげないとね  
じゃ、またね、アリエル♪」

投げキッスを放ち、軽やかな足取りで走り去っていく褐色少女に、アリエルは取りあえず笑顔で手を振って見送る。結局なんだかよくわからないけれど、まあいいやと思う。

物事を真剣に受け止めずその時々のおもしろさを笑顔で過ごすようになったのは、自分の魔法の才能が欠片ほどもないと思いつつ幼い日からだった。

どれほど必死に努力しても、簡単な魔法すらいつまでたってもまともに扱えない。

そしてその傍らで天才的な魔力を発揮し始めた従姉妹の目映ゆい姿を見てしまった時から。

彼女を護れる騎士になりたかったのに。

いままでずっと彼女に護られるばかりだった。

力を欲しても叶わず、いまでは幼い子供と戦ってすら一方的に叩きのめされる能無しだ。想いは心の奥深くに秘め、明るく楽しい仮面で自らを飾ることに決めた。けれど……。

（最愛の従姉妹を……、セレスティアを護れるほどの強い男になりたい！）

思いを決して言葉にはせず、胸の奥に深く沈める。

「それでさっきの話だけだ」

少女二人が去り、周りの注目がなくなったのを見計らってアリエルは声をひそめた。

「うん、古い文献には確かにそう記されていたよ。ボクの曾祖父は古の魔王と大魔導士の戦いについてかなり詳しく研究していたみたいだからね」

「なんの魔力も持っていないなかった男が、一夜にして魔王を打ち倒すほどの力を得て伝説の大魔導士になった。その技法が記された禁断の魔導書か……。なんだか信じられない話だけれど、それが本当ならお前もセレスティアのような天才魔導士になれるかもしれないな」顔を寄せてひそひそと真剣に語るユリウスに比べて、パーシーの口調はいかにも眉唾とあった様子だ。もちろんアリエルも丸つきり信じているわけではない。けれども、

「うちの書庫に未整理のままの古文書がたくさんあるから、もしかするとその中に紛れているかも。まあインチキならそれはそれで話の種になるしね」  
心の底で密かに希望を抱いてしまう。叶わないと半ば諦めつつ。

「腹へった、それに疲れたあ」

「もうこんな時間だしね。続きはまた今度ということにしようか？」

もう外はすっかりと暗くなり、天窓からは冷たい月の光が差し込んできている。

授業が終わって寮に帰らずアリエルの実家へとやって来た二人は、離れの土蔵をまるまる使った書庫の中で、禁断の魔導書を探し続けていた。

伝説の大魔導士の子孫であるエインズワース家の書庫には、確かに当時のものと思しき

書物が収められていたが、整理がなされたそれらは何代前の先祖に変わり者がいたとか、一族の記録的なものがほとんどで、魔導に関してはいまでは当たり前前に広く伝わっている術式や、廃れてしまった魔法の記述ばかり。

目当ての未整理の書物などは、さすがに長い間放っておかれただけあって『これ、保存しておく必要あるの?』と首を傾げたくなるようなものしか出てこない。

「じゃあそろそろ切り上げようか。もう遅いし今日はうちで晩飯食っていきなよ。ついでに泊まっていてもいいし」

やはりこんな結果だろうと、残念がるでもなくアリエルが立ち上がる。

長時間屈み込んで本の山を漁っていたので身体が痛い。

大きく伸びをしながら、なんの気なしに手に取ってしまった本を確かめる必要もなしと投げ捨てようとした。

「お、おい、待てっ!」

パーシーの声に、動作を止める。

「もしかしたら、それかも!!」

珍しくユリウスが興奮に声を弾ませる。

「へ……? これが、なに?」

手放す寸前だった本を確かめ見る。埃にまみれてタイトルも読めない古めかしい装丁の

分厚い本。確かにいままで穿り返していた粗末な冊子とは雰囲気からして違う。

何の気なしに表紙を開いた。

月光が照らす羊皮紙のページには見知った言語とはなにもかもが違う、異文化の文字が綴られている。当然アリエルには読めないはずなのに、

「ア、タエタ、マ……へ、ワレニア、シキヲナ、シオニナ、グサムヒ、メヲオソ、イシオ、ニヲウ、チハラウ、チカ、ラヲ」

「ア、アリエル……？」

「シッ。静かに……」

以前にルクシヤナが話していた母国の言葉に似た。いやそれよりもっと、繊細な響きをした古き香りのする、自分たちとはまったく異なった文明から生まれ出たような言語。

瞬きも忘れて書物に見入りながら、意味もわからぬ言葉を呟くアリエルに法衣を纏う少年が声をかけようとするが、ユリウスに止められる。

「ワレオ、ニキリノタ、チザン、シヨウヲモチイ、テアッキドウジヲウ、チハラウ。ワレオニナ、グサムヒ、メノシユ、ゴシヤ、オニキ・リヒメ……ナリ」

放心したように詠唱が続く、そして唐突に終わりを告げた。

その刹那、天窓から覗く月の輝きが増し、アリエルの身体が目映ゆい光に包まれた。「うわっ、なんだ、これ？」

「古の禁術が発動したのか？」

放心したように無反応のアリエルを、見たこともない文字列の紋様が取り巻く。

魔力とは異なる力の波動が押し寄せ、パーシーとユリウスが身を屈める。だが始まった時と同様の突然さで、輝きと文字列がアリエルの身体に吸い込まれ、すべての現象が唐突に終了した。

「えっ？ あれ……？」

古文書を手你放心していた赤髪の少年が我に返った。

「ぼく、どうしてたんだ？ なんだか頭の中に声流れ込んできて、そうしたら身体が内側から捲り返されるような感覚がして……」

本に記された異質の文字を読み上げた記憶もないらしい。

ただ呆然と佇むアリエルに、友人たちが興奮気味に声をかける。

「なんだかすごかったぞ。変な言葉を唱えたかと思ったら、いきなり光とか文字とかが眼前を包み込んで!!」

「それで魔力が宿ったのかな？ ちよつと試しに術を使ってみてくれないかな」

「う、うん。じゃあ、今日の授業でやったやつを」

両手を前方に掲げ意識を集中させる。呪文の詠唱を始めた途端、  
ぶすん、ぼすぼすぼす、ぷっしゅっしゅ。



「あれれ……、やっぱりダメだ……」

くすんだ色の光が微かに出現し、ミミズのようにのたくったかと思うと、気の抜けた音を立てて消滅した。

「魔力……強くなっていないな……」

「うん……。まあ、こんな本読んだだけで魔法が使えるようになるなら苦労しないしね」  
ちよつとガツカリだけど本気で期待していたわけではない。

「でも面白かったよ。こんな書庫なんて普段滅多に入ることないし。他になにかもつと役に立つような本でも見つければよかったんだけど」

大切に保管しておく価値もないような先祖の遺産に苦笑しながら、なんの効果もなかった禁断の魔導書を未整理本の山の中に戻そうとする。

「すまない、アリエル。その本、よかつたらしばらくボクに貸してくれないか？」

押し黙つてなにか考え込んでいたユリウスが、真剣な顔つきで尋ねてきた。

「うん、別に構わないけど」

なんだか彼の期待を裏切ってしまったようで、申し訳ない気持ちになりながら手渡す。

「すまない。ボクがもつときちんと調べておけば、こんなことには……」

この件はユリウスが持ちかけてきたことだ。変な期待を持たせてアリエルを落胆させたのではと詫びてくる。

「いや別に気にしてないってば。それよりどうするの？ そんな本。なんだか見たこともない変な文字が書いてあるだけだし、調べようがないと思うんだけど」

「いや……、なにか、わかったら報告するから……」

渡した古文書を大事そうに抱えるユリウスに尋ねると、いつもは軽い口調で人をからかうように喋る彼が、はつきりしない様子で口籠もる。

奇妙な雰囲気のまま、三人はアリエルの家でご馳走になることもなく、そのままなし崩しに解散となった。

「うう……、あいててて……」

昨日の夕方からずっと悪い姿勢で本を探していたためか、身体の節々が痛かった。

埃だらけの場所で喉も痛めたのだろう。妙に甲高い変な声になっている。

学園は全寮制のため、実家に泊まるのは久しぶりだ。

その為か疲れているはずなのに妙に早く起きてしまい、やたらと眠い。

全身が虚脱感に包まれふらふらする。それでもベッドから起き上がると、アリエルはふらつく足でトイレへと向かった。

寝る前に水ものを飲んだ覚えはないのに、妙に尿意が強い。これ以上我慢したら、漏らしてしまいそうだ。

(それにしてもなんだか身体が重いな。肩……？ っていうか胸になんだか重りがぶら下がっているような……)

ともかくパンツを脱ぎ下ろし、大あくびをしながら下腹に力を込める。

じゅわ、じゅろ、じよろろ……。

早速尿道に熱い込み上げが押し寄せ、その感覚の短さにまさに漏らす寸前だったことを思い知る。迸る熱液の感覚。排泄の快感に溜め息が漏れた瞬間、

「えっ？ うわっ、うわわわわっ！」

脚を伝って真下に流れ落ちる小便の温かな感触に、驚き慌てふためいた。

脱ぎ下ろした下着に、先っぽが引つかかっちゃっていたのだろうか？

そんな感触はなかったのだけど、寝ぼけていて気がつかなかったのかもしれない。

下着はもう脚とともにびしょびしょだし、床も汚しちゃっている。

括約筋を引き締めるが、一度勢いづいた小便は止まらない。なんだかそのこらえる力が、いつもよりずっと弱くなっている気がする。

眠気が一気に吹き飛び股間を確かめた。

「え……？」

下を向いたアリエルの目に最初に飛び込んできたのは、圧倒的なポリウムを持った、二つの大きな膨らみだった。寝間着を大きく押し上げて胸が盛り上がっている。ボタンが

千切れそうになったその胸元から二つの房が押し合い深い谷間を覗かせている。

「ふえええっ!!」

さらに頭を迫り出して股間を確かめると、

「う、うそ……っ!!」

そこから突き出ているはずのが小さくもない男の象徴が、見当たらない。つるんと微かに盛り上がった下腹部が見えるだけでよくわからないそこを、排尿が止まらぬまま慌てて探ってみると、

「ふえっ!! な、ない……!! ちんこ……が、な、なくなつて……る!!」

当然そこにあるはずの大事なものが、跡形もなくなつていた。

「な、なんで? どうして!! え、ええええええええっ?」

「ぼくの身体……、ど、どうなつて……!!」

もう一度、ペニスの消え失せた股ぐらを、指でまさぐり確かめる。

「ソッ! な、なに……? いまの、感じ……。それに、この……感触……つて?」

触れた瞬間に、全身が痺れるような刺激が走り抜けた。

まるで傷口に直に触れたような、それでいて痛いのではなく、むしろ気持ちいいような、強烈な刺激に面食らう。

(す……すごく、敏感に、なつてるし……。それに……)

ペニスが消え失せただけでなく、小便が溢れ出る部分は肉の襞が複雑に重なり合った溝になっていて、その部分に軽く触れただけで、全身に熱い痺れが走る強烈な心地よい刺激が走って、へなへなとそのままへたり込みそうな虚脱感に見舞われるのだ。

「なんなんだ……？ これ……。いや……。まさか……。でも、そ、そうなのか？」

以前にパーシーがどこからか入手してきて、男子の間で回し読みしたエッチな雑誌に写真が載っていた。実物を目にしたことはないし、ましてや触ったことなどない。けれども、これがきつと、そうなのだろう……。

「おんな……。の……。？ じゃ、じゃあ、この……。膨らみは!？」

身動きするたびにゆさゆさと揺れ弾む。股間を覗こうとすると嫌でも目に入る重量感たつぷりな撓む膨らみを手で掴んでみる。

「はうっ！ く……。ふう……。ッ」

途端にこちらからも、股間とは違った甘い快感が膨れ上がって鼻にかかった甘い喘ぎが漏れ出てしまった。男の声だったら、そんな喘ぎは気持ち悪い。なのにいまアリエルの口から溢れた声は、甲高くか細く可憐な、色香に満ちた魅惑的な声色になっている。

「くああああ、こ……。れ、柔らかい……。指、どんどん埋まり込んでいっちゃうし、揉むと、あ、ああ、はああああ……。気持ちよさが、強くなつてっ!! んくううっ!」

寝間着の上からじゃ物足りなく、ボタンを外して中身をさらけ出すと、圧倒的な膨らみ

が弾け出るようにして奔放に跳ね震えた。

直に触ると膨らみはさらに柔らかく、肌の感触がきめ細かで上質な触り心地を与えてくる。しかも手のひらにしつとりと吸いついてくる、少し汗濡れた感触に夢中になりながらますます揉み弄っていると、下腹のほうでもジンジンと悩ましい疼きが強さを増してきた。「あ、あああああ、これ……、こっち、も……」

結局すべて出しきった尿が止まった股間。その小水に濡れて綻んだワレメに指をめり込ませる。

「はうっ!! あふ……うう……。この……感じ……い」

ひらひらとした薄い肉花弁がまとわりつくのを掻き分けて、ヌルヌルした内側の粘膜部を軽く穿るように擦ったそれだけの刺激で、目の前に火花が散って息が止まるような甘美の衝撃が襲い来た。

(び……敏感……すぎる。ここ、こんなに、感度……高いッ。あ、ああ、でも、触るの、やめられないっ!!)

刺激が強すぎて頭がおかしくなりそうだ。なのに、くちゅくちゅと液と濡れ肉が掻き乱される淫靡な音色を奏でながら、変質した股間をまさぐるのを抑えられない。

「なん……だか、ヌルヌルが、増して……きた……。あ、ああ……、これ、ちんこ、扱くより、ずっと……」



「——!! あら、ユリウス。どうしたのこんなところで」

いつの間にかそこにいた級友に驚くが、辛うじて態度に出さぬようにこらえた。いつもはアリエルにしつこいくらいつきまとい、男のくせに彼を誘惑しようとしている胡散臭い少年だが、ここ数日は古の魔導書の研究に没頭していて余り姿を見せなくなっていた。

(ルクシヤナだけでも手強いのに、アリエルが女になった途端、パーシーまで色目使い始めたし。こいつまでいたら手に負えなくなるから助かってたんだけど……)

本来なら彼を巡ってのライバルなんかいないはずなのに、魔法が使えないというハンデを負いながらもあの従兄弟はやたらと人を惹きつける魅力を持っている。

(わたしなんか、魔法がなければこんなちやほやされることなんて絶対ないのに……)

無愛想で高飛車で素直じゃない。わかっているけどどうにもできない自分の性格に苛立ちながら、どうにも得体の知れない男子生徒に訝しげな目を向ける。

「なにかわたしに用？」

苛つきながら尋ねると、相変わらず表情の読みづらい糸目顔で微笑みかけてくる。

「いや、もしかしたらアリエルを探しているのかなって思ってたね」

「——アリエルがどこいったか知ってるの!？」

思わず掴みかからんばかりの勢いで問い詰める。

さっさと教えないと魔法をぶち込みかねない様子だが、ユリウスは恐れる様子もなく薄



笑いを浮かべ続ける。

「もちろん知っているよ。いまボクのしもべととても楽しいことをしている最中さ」

「あんたの、しもべ？ た、楽しいことって、なによそれ!!」

飄々とした軽薄な態度が、言葉を発している最中に一変した。

一転して纏う禍々しい、そして威厳さえも感じさせる気配に、セレスティアは飛び退き魔法の杖を構える。

「あんた……ユリウスじゃないわね。誰？ アリエルはどこ?! あいつになにをしてるのよ!」

魔力を杖の先に集中させ、いつでも全力の炎弾を放てるようにした。並の人間ならば、当たれば即死の威力だ。けれど目の前の級友の姿をした何者かは、それさえも効くのかどうかわからない。そんな圧倒的な気配が、セレスティアを戦<sup>おの</sup>かせる。

「いやだなあ、ボクは紛れもないユリウス・バイロン本人だよ。ただし長い時を経て人間の身体に転生させられた姿での名前だけだね。けれど我が記憶を閉ざしていた封印はすでに打ち破られた。かつて我を打ち破り封印を行ったオニキ・リヒメの末裔の手によって!」

「封印を、打ち破った……? ま、まさか……お前は……!!」

幼い頃に何度も聞かされた先祖の伝説が脳裏に浮かぶ。

「あとは剣士が護りしオニナ・グサ・ムヒメの末裔である、お前に秘められた力をすべて

引き出し食らうだけ。そうすれば我が肉体をこの脆弱な人の身体へと貶める忌まわしい封印を打ち破り、真の姿へと完全なる復活を遂げられる！」

次第にその身から溢れ出る禍々しく黒い力はもうすでに、セレスティアと互角かそれ以上の威力に達していた。

「我はトリスタン。かつてこの地を治めていた、魔族の王!!」

渦巻くようにその魔力の奔流がユリウスの全身を包む込み、漆黒の閃光を放った。

「くっ！」

暗闇に視界を奪われ目をこらす。光が戻り来るその目の前に、顔立ちはさほどユリウスと変わらないが豪奢ごうしゃな黒いローブを纏い、前頭部に二本のツノを生やした伝説の魔王が、鋭く禍々しい輝きを湛えた瞳で不敵な笑みを浮かべていた。

「こ、これが……魔王……トリスタン……」

級友だがそれでいてまったくの異質な人にあらざる者を呆然と見詰める。

すべての魔族を畏れ従わせ、人が住まう地を恐怖と絶望に陥れた深き闇の権化。

禍々しい瘴気を漂わせるその姿に、幼い頃聞かされ怯えた数々の所業の恐怖がセレスティアの心に甦った。

「さあ来い、セレスティア・エインズワース!! お前の想い人の前で力を導き出し、すべて食らい尽くしてやる。我が糧となれ！」

その彼女の腕を掴もうと指を伸ばして来るが、

「——!! 誰がつ、お前なんかにッ! アリエルを返せっ!!」

怒りを滾らせ、さらに目一杯魔力を杖へ集中させる。声を張り上げながら、全力の炎弾を間近からユリウス、いや魔王トリスタンへ叩きつけた。

ゴオオオオアアアアアアアアンッ!

骨すらも焼き尽くす高出力の火炎。しかし、

「うそっ!!」

魔王トリスタンはローブの裾を翻しただけで、セレスティアの全力の魔法を蹴散らした。「我と我が眷属に、魔力は効かぬ。滅ぼせるのはただ一つ、オニキ・リヒメの大剣より放たれる、レンキの力のみ。そして我の完全なる復活の糧となるのも、セレスティア、オニナ・グサ・ムヒメの末裔たるお前がその身に秘める、膨大なレンキのみ!」

「ぐふっ!!」

呆然と立ち尽くす魔導の天才少女の腹に、目にも止まらず踏み込んできた魔王の当て身が叩き込まれる。

(レン……キ……? 剣を……持ったアリエルが纏ってた、あの不思議な魔力……? あ、あれが、わたしに……も……)

遠ざかる意識の中で、身体の奥にいままで感じたことのない脈動が膨れ上がってきてい

るのを感じながら、セレスティアは魔王の腕の中に崩れ落ちた。

「も……もう、気が済んだ……だろ？ 放してくれ、ルクシャナ……、んああ……」

まだ絶頂の余韻に痙攣が収まらない。膣口も浅く挿入された亀頭をキユンキユンと締めつけ、脈打つ子宮はだらしく蜜汁を溢れさせている。

それでもアリエルはどうか保っている理性を振り絞って、褐色娘に訴えかけた。

「ど、どうして……？ とても気持ちよかったですよ？ 女の子の身体、気持ちよくしてあげたでしょ？ なのに……。あ、あたしじゃ、だめなの？ そんなに、セレスティアのことが……好きなの？」

歡喜に蕩けた愛くるしい美貌が、愕然と強張る。

「好きになってよ！ あたしのことっ!! あたしは、アリエルのこと、こんなに好きなんだからっ！ セレスティアを好きでいたって、悲しい思いをするだけなんだからっ!! だから、あたしを好きになって、幸せになってよっ！ アリエルっ!!」

悲痛な声を上げて迫り来る。巻きつく触手に圧迫された乳房を荒々しく揉みながら、無理矢理に唇を奪ってくる。

「んふうっ！ ふあああっ!! あ、ああああっ！ だめっ、い、痛いッ、そんな、強くだめっ!! あ、あああっ、はあああああっ！」

過剰な刺激に確かに痛みが突き抜けるが、それもすぐに疊惑の疼痛となって乳房から全身に広がる。またこのまま官能の泥沼に沈み込みそうになりながらも、アリエルは必死に口づけから逃れ、ルクシヤナに訴えかけた。

「この前の、パーシーみたいにお前もエッチな気持ちが高まりすぎて暴走してるんだろ？ た、頼むから、んふうっ、しょ、正気に……、はうんっ!! 正気に、戻ってくれっ、あ、ああああっ、くうっ、あんんっ!」

膣口をくちゅくちゅと浅突きする触手のストロークが再開され、それに従って乳房を中心に身体中に絡みついたイボ蔦の蠢きも活発さを増す。

背筋を反り返らせて快感に喘ぎながら、懸命に訴えかけるが、

「あたしは……正気だよ。それに、この前の男の子たちがエッチに暴走したの、あれは仕組んだことだから……。あたしの……主<sup>あるじ</sup>が」

思いも寄らなかつたことを打ち明けられた。

「な……、なに、いつてんの……？ ルクシヤナ……、な、なんで、そんなこと……」

「あれはセレスティアとアリエルの……、オニナ・グサ・ムヒメとオニキ・リヒメの繋がりを強固にして、セレスティアのレンキを最大限にまで引き出すため、男の子たちの性欲を暴走させて襲わせたの」

オニナ・グサ・ムヒメに危機が迫る時、その者が最も心を寄せる者が、オニキ・リヒメ

として覚醒し、命を懸けて護り通す。

そして心によつて深く結びついたその守護者に危機が迫る時は、さらなる力を与えるべくオニナ・グサ・ムヒメの身に、膨大なレンキが湧き溢れる。

あの魔導書からアリエルの頭へと流れ込んできた知識が浮かび上がった。

そんなこと、ルクシャナは知っているはずなのに。

「お前は、いったい……？ それに、あんなことをした、あ、主……つて？」

「あたしだつて……さつき、すべて思い出したの。あたしが生まれるずっと前。人間として何度も転生を繰り返す前。あ、あたしは、この地を統べる大魔王トリスタン様に仕える魔族だつた……。異世界から来たオニキ・リヒメと戦うトリスタン様を庇つて、一緒に倒され人間に転生する理ことわりへと封印された」

「な、なに……いつてんだ？ ルクシャナは、人間だろ？ 第一この国とは関係ないクルキスタンで生まれたんだし……」

「場所は関係ないの！ 魔法のない国であたしだけが、魔力を持って生まれたのがその証拠。そして引き寄せられるように、この国に留学してきた。そして出会つたの。全部思い出させてもらったの。トリスタン様に!!」

姿形は変わらないが、彼女を取り巻く巻く気配が以前とは丸つきり変わっていた。

歡喜とそして悲しげな表情が複雑に入り混じつた眼差いで、女体化少年を見詰める。

「でも、アリエルを思う気持ちは、いまこの時も変わらない……。もう今頃オニナ・グサ・ムヒメは……。セレスティアは、トリスタン様の手の中。あの方に力を……。魔力ではなく、レンキ」という生命を司る力を奪われるさだめ」

「なっ!? セレスティアがっ!! どこだっ!! ふああうっ、は、放……。せつ、助けに……。んあ……。あ、い、いかな……。ちや、あ、はあああつ、んふううっ!!」

最愛の従姉妹の危機を告げられもがくが、やはり触手はビクともせず、官能に蕩けた女体を弄ばれて呆気なく悶えてしまう。

「膨大な力を得て完全復活を遂げたトリスタン様には、もうあなたでは敵わない。戦ったら……。殺される……。だから、お願いだから、セレスティアのことは忘れて。あたしの気持ちを受け入れて。あたしを好きになって。あたしが……。たとえトリスタン様を裏切ることになっても……。あたしがアリエルを護るから!」

「や……。だ……。あ、あああつ、んふあああつ!!」

オニナ・グサ・ムヒメを護るのはオニキ・リヒメの宿命なのに。セレスティアがいま、魔王の手にかかろうとしているのに。妖魔を打ち倒した力が現れない。

魔法が通じぬ妖魔さえも一太刀で屠る大剣クサン・シオルが出現しない。

もどかしい思いと、身体を翻弄する女の快感に悶え呻く中、

「嫌でも……。あたし諦められない。もう決めた。無理矢理でも、これで嫌われちゃって

もいい、アリエルをあたしのものにして、あたしもアリエルのものになるからっ!!」

女体化少年の拒絶の叫びに大粒の涙をポロポロとこぼしながら、ルクシヤナは触手の中でも特に極太の一本を引き寄せると、自分の股間にあてがった。

「エル・クラフ・ルシュト・アルブ・ラウル・クヒルツ!! ん……、んく、あふ、あ、ああああ……んはああっ!」

女陰と重ね合わせた部分を指でなぞりながら呪文を詠唱すると、長い触手が途中で千切れ、その切り口とルクシヤナの陰部がみるみるうちに結合した。

「ひうっ!! ル、ルクシヤナッ! そ、それ……」

まるで彼女の股間から極太の陰茎が生えたような狂おしい姿に、アリエルが戦く。

「アリエルの膣内に挿入たくてもあたし、おちんちんないから。これで代わりにしようと思つて……。でもあたしもアリエルに挿入て欲しいから……。だから、これ、アリエルの膣内に挿入ったぶんだけ、反対のところがあたしの膣内にも挿入ってくるように……。したから。それに、これの神経とあたしのクリトリスも繋げたから、これがアリエルの膣内に挿入つてく感じ……。きちんと味わえる……」

「ちよ、ちよつと、待つて! ルクシヤナっ!! そんなの、だめだからっ!」

慌てて説得を試みるアリエルだが、ルクシヤナはもうすでに大好きな少女と結ばれる喜びに恍惚とした表情でのしかかってくる。



「大……丈夫、優しく、するからあ……。それに痛いのも、一緒に味わえば怖くない……。よ。大好きだから、アリエル。あたしを、受け入れて……」

「ぼく、男なんだしつ、それにルクシヤナもこんなことで、初体験なんて、ダメだろつ!! や、やめろ、やめ、ああつ!! おあああああ——つ!!」

ぬぶ、ず、ずぶぶ、ずぶ……ッ!

拒絶も虚しく、潤みほぐれた女穴に触手巨根が力強く押し込まれる。

(く、ああ、挿入<sup>はい</sup>つて……く、るうつ!!)

いままで同じ部分を弄んでいたものよりも、一段と太く硬い勃起肉がより深くへと埋まり来た。目一杯に膣口を押し広げられる切迫に目を見開き息を詰まらせるが、いままでより深い部分の膣壁が極太の到来に歓喜して狭く窄まる。しかしその甘美も束の間、

「くううつ! あ、あああつ!! こ……れえ、あ、ぐうううつ!」

亀頭の先端が穴の途中で行き止まり、アリエルの膣内が鈍痛に見舞われた。

(まさ、か、こ、れ……処女、膜……ッ!! あ、ああ、そんなあつ!)

男の時にはクラスの中の女の子が経験あるのかとか処女だとか、悪友たちと想像し噂した。その純潔の証となる薄膜が自分の身体にある衝撃に呆然となる。

(これ……破られ……たら。ぼく、処女……じゃ、なくなっちゃう……のか!?)

男なのに、自分が処女である意識して胸の高鳴りが激しさを増す。

しかも男なのに、それを破られるのが、処女を失うのが、何故か怖くてたまらない。  
(ぼく……あ、あああ、なつちゃんなんだ……。お……おんな……に……)

男であるだけになおさら、これを突き破られてしまったら女としての自分が完成してしまふ恐怖が込み上げる。

「あ、あああつ、こ、れ、痛……い、けど……ッ」

触手陰茎の根本に密閉され外からは見えないルクシヤナの膣にも、女体化少年に挿入<sup>はい</sup>した分だけ触手が埋まり込んでいた。その先端がやはり処女膜に突き当たっていた。

二人ともに初体験の戦きと破爪痛を予感させる鈍痛に怯え顔を浮かべる。それでいながら、元から女である彼女は、好きな男の子と交わっておんなになる喜びを顔に滲ませている。

「アリエル、と、結ばれる、ならあつ!!」

想いを募らせる褐色少女が、腰を突き出してきた。

ぬ……ずぶ、ず……。

「ひうっ! だ、だめっ、やめッ、ルクシヤ、ナッ!! くうっ、あ、つあああつ!」  
ぶちいいっ!! ずぶっ! ぬずずずぶうっ!!

「あぐううっ!! あ、あああつ!」

二人ともに処女膜を突き破られ、膣内で弾ける焼けるように熱い痛み<sup>いたみ</sup>に打ち震えた。



「うぐつ、う、んう~~~~~ッ。こ、の……お」

身体の芯から力を抜き取られたような不思議な虚脱感に見舞われた。少しでも気を弛めれば一気に理性が崩壊しそうで、懸命に歯を食いしばる。

(集……中、できない……。魔法、使え……ないッ)

呪文を詠唱しようとしても、最初の一言が咄嗟に出てこなくて愕然とする。いままで何度も発動させた、いまでは手足を動かすように使いこなせるはずの単純な魔法ですら、弛緩した身体同様にまともに扱うことができない。

「くっくっく、やはり極上の味わいだ。これほどのレンキを有したからこそ、学園始まって以来と賞賛されるほど強大な魔力を意のままにできたのだな。その力、すべて我が貰い受けてやろうぞ!! もっと悶えろ! 快楽に溺れるっ!! 情欲の昂りこそが、お前の身の内からより膨大なレンキを溢れさせるッ!」

歓喜に昂る魔王の身体から、セレスティアより奪った力が禍々しい魔力と化して揺らめき立つ。力を取り戻しゆく彼の下に馳せ参じるかのように、薄闇からミミズを思わせるぬめぬめした肉色の触手が湧き出し、弛緩した少女の肌へと群がった。

「ひうつ!! やあああつ、な、なに、これっ!! あ、あああつ、気持ち悪いッ! 助けて、アリエ、ル……ッ!! あ、あああつ、んはあああつ!」

ヌラヌラとした粘液を滲ませた細長い無数の蠢きは触れた心地もおぞましく、鳥肌を立

てて魔導少女が身悶える。それを嘲笑うかのように肉ミミズたちは弱々しく震わせる肌の上を我が物顔に這い進んで、彼女の鋭敏な箇所を狙い定めて刺激してきた。

「ほあつ、ああつ、だああ、だめえつ!! そんなとこつ、やだ、気持ち悪いッ、汚いいいつ! あ、ああつ、あ、取つて取つて取ッ、へ、あ、ああ、あああ〜〜〜ッ!!」

怖いもの知らずの少女だが、幼い頃から土中に住む肉色の細長い生物は苦手だった。

しかし人前でそれを恐れたことなどないし、誰かに指摘されても嫌いだと認めたことなどなかったのだが……。いまは耐えきれずにわめき散らす。

嫌悪感に顔をしかめ払い除けようと萎えた手を持ち上げるのだが、ミミズ触手は制服どころか下着の中にまで入り込んで豊満な乳房を這い上がる。

ぐち、ぬちゃ、みぢ、ねちゅ、ぢゆる、ぬと、ぬちゅ、げじゅ、ず……。

トリスタンの指に揉み弄られたよりもさらに汚らわしい、触れたところから細胞が腐りそうな刺激をみぢみぢともたらして、感度の高い乳房をくねりながら昇る。

「やだやだやだやだやだやだやだやだああだああつ、やだああああつ!! う、ぎ、イイイいいッ!」  
いまにも正気を失いそうな汚らわしさに、食いしばった歯の間から唾液の泡を吹き、白目を剥いて身を強張らせる。激しい拒絶の感情が渦巻く中、

こぶ、ぐじゅ、ぶつ!

頂まで登りついた触手の先端が、産毛のように細かく、そして鋭い歯をびっしりと生え

させた口を開き、乳首にばっくりと食らいついた。

「ふぎっ!! お……、あ、ああつ! い、いやあつ、こ……お、こんな、のっ!! くうううっ、ああつ! だめ、あ、ぬう、ああつ!!」

充血して硬く張り詰めそそり勃ち、むずむずとした疼痛を脈打たせる鋭敏極まりない肉小粒に、無数の細かく鋭い棘菌がプスプスと突き刺さる。

痛いような痒いような複雑極まりなく濃厚な高い、そして強い刺激が容赦なく爆ぜた。

「こんなのっ、違……あふうっ! くくくよく、なん、か。あ、ああつ、も、もおっ!!」

乳首から全神経へと走り抜ける許容を越えた刺激に、きな臭い匂いが鼻腔を満たす。

どれだけ力を振り絞っても上体を起こすことすらできなかつた脱力の身体が激しく波打ち、仰向けのまま背を海老反らせて大股開きに股間を高々と迫り上げる。

（お、おっぱ……いい、だめ、なっちゃ……うう、あ、ああつ、こんなの、わたし、おかしく……なるううっ!!）

触手が食らいついている部分から乳首を越えて、巨房全体へと狂おしい疼痛が一気に広がった。ただでさえ大きな乳房が、何倍にも膨れたような切迫感に見舞われ息苦しさを覚える。ジンジンと焼けるような熱さが、乳房から身体中へと広がりゆき、落ち着かぬ焦燥感に駆られた。

「はあああ、ああ、は、ああああつ、んぷ、ふあ、ん……あう、こ、これ……え……」

「香気だけでは物足りないだろう？ いま体内にも欲情を促進させる毒液を注入してやっただぞ。さあ、悶えろ、淫らに崩れろ、甘美に打ち震えて極上のレンキを生み出せ、オニナ・グサ・ムヒメの末裔よ！」

心臓の鼓動が狂ったような速さだ。全身から汗が溢れ出て制服を透けさせながら、触手の粘液とが混ざり合いねっとり糸を引いて滴り落ちる。

(は、ううっ、アリ、エル……う。あ、ああ……、わたし、んうっ、ふああ……っ)

胸の高鳴りに呼応するように、下腹の奥で狂おしい疼きが激しく脈を打ち続け、身体をもどかしく切ない思いに染めてしまった。幼い頃から焦がれてきた従兄弟を脳裏に思い浮かべ、彼の腕に抱き締められる妄想を繰り返す。

「ひ、あ、そ……ん、なあっ、んくうううっ、ひいつ！ ふわ、ああふああああっ!!」  
途端に、一際激しく下腹の奥の蜜壺が躍動し、こらえる余裕もなく股間へと熱い液汁を噴きこぼした。

「おや、アリエルに抱かれることでも想像したか？」

「——!! ち、違うッ！ わ、わたし……い、あふっ、そ、んな、こ、と、あ、ふあ、あ、ああああ、そんなこ……とお。ん、んんっ!!」

魔王に妄想を見透かされ、慌てて否定するが、意識するとなおさら従兄弟のことを思っ てしまい、愛液が止まらなくなる。男の姿の彼はもちろんのこと、女になった彼女と

浴室で肌を触れさせ合ってしまった、あの時の感触が鮮明に甦って止まらなくなる。

「んくうッ、ふ、うううッ、あ、はあああ……ッ」

「欲しくてたまらないみたいだな、そんなに腰を振って。こんなあられもない様子を見たら、アリエルもたまらずむしやぶりついてくるだろうなあ」

「はっ？　ば、ばっかじゃない……？　あ、あいつに、そんな度胸ッ、あ、あるわけ、ない……ッ、くふ……あ。ないじゃ、ないのっ!!」

むしろそんな気概のある男だったらよかったのと思う。

無意識の内に迫り上がった腰が卑猥に蠢いてしまっていた。こんな姿をもし大好きな従兄弟に見られたらと思っただけで、顔が真っ赤に火照って涙が溢れてくる。

（あ、ああ、ま……まさか、入って、こないわよね？　アリエルう、ああ、こんな、やだあっ!!　なんで……こんな。も、もおおっ!）

あれほど彼に来て欲しい。助けて欲しいと願っていたのに。

こんな姿を見られるくらいなら、死んでしまったほうがマシだ。

「そんなにアリエルにここに来て、その淫らな姿を見てもらいたいのかい？」

しかし魔王トリスタンは、また口調を胡散臭いクラスメイトへと変えて、セレスティアの思いと真逆なことを尋ねてきた。

「ほああ!?　バ、バカじゃ……ない？　そんなわけ、な、ないでしょ!　こんな様ッ、ア、



アリエル……だけじゃなくて、他の誰にだって、見られたくなんか、ない、つてばあつ!!」

心の中で焦がれていても、他人に、ましてや忌まわしい大魔王の生まれ変わりなんかの前で、秘めた思いを肯定したくなんかはない。それがたとえ、見え見えだったとしても。

いまさらながらに、アリエルなんか別になんとも思っていない振りを装って答える。

「いや、違うでしょ。キミは彼に抱かれたがってるんだ。だから発情させられた状態でアリエルのことを思い浮かべたら、こうして身体の歯止めが効かなくなった。身体中が、彼に触られるのを望んで、感度を高めた!!」

「なっ、あ、あああつ、ち、違……あ、ううっ!」

気を逸らした覚えはなかったのだが、正面にいたはずのトリスタンがベッド脇から耳元へ囁きかけてきた。まったくの言いがかりなのに、本心を見透かされたようにドキリとしてしまう。その動揺に浮つくセレスティアの後ろから身体を抱き起こすようにして、魔王は汗濡れた制服に形をくつきり浮き立たせて膨らむ撓わな乳房を大胆に揉んでくる。

「ひっ?! おふぁあつ! んぁ、あ、ああつ、はひいんっ!!」

拒もうとした声か、媚びるような嬌声になって弾け出る。

（く……う、こんな……のっ!）

気持ちよくて仕方がなかった。指が房肉に深くめり込んで、少し乱暴に捏ねてくるとう

ねるような快感が尻肉が破裂しそうなくらい膨れ上がる。

これがアリエルの手だったらと妄想を脳内で繰り広げて、下腹の疼きにもじもじと腰を浮かした。

「わかるよ。そっちも欲しくて仕方がないんだろ？」

「——!! だ、だれがっ! そんな、ことよりわたしのおっぱ、んくう……、胸……から手をどけなさい……ってばっ」

勢いに乗って股間まで触ろうだなんてそうはいかない。胸はまだ仕方がないが、大切なところを他のやつなんかに触らせるわけにはいかない。しかし、

「ふわっ、だめっ! やだってばっ!! 来るなッ、ううっ、あ、ああっ!!」

トリスタンの手は乳房から動かない代わりに、無数の肉触手がぞわぞわと身体を這って、ショーツの中に潜り込んできた。

激感に勢いよく打ち震えまくったせいか、どうにか自分の意志で動かせるようになった。萎え脚を慌てて窄めて陰部を護ろうとする。だがミミズのような肉色の触手たちは女陰には目もくれず、後ろの穴へと殺到した。

「ひいひいっ! いやっ、ああっ!! くひやはああっ!」

肛門を鳥に啄まれたかのような、少し強めの刺激に見舞われた。

我慢すらできず、上擦った悲鳴を情けなく張り上げてビクンと尻を浮き上がらせる。

(うそ、お、おおつ、そつち、なんてええつ!!)

従兄弟にだけ許すと決めた秘めやかな聖域は侵略を免れたが、思いも寄らない穴口を攻められどうしていいのかわからず戸惑う。その無防備な菊花弁に窄まった鋭敏部を、トンツと小気味よい勢いで触手の先が弾いてきた。

「ふえへ、ほ、おお、あ、あ、あああつ!!」

肛門の周りを落ち着かなくさせる疼きの余韻に身を振る。

(や、やああつ、もうつ、なんで、お尻い。こんな、いっぱい!! あふつ、はうつ! あ、あ、あああつ、い、いやああつ!!)

膣穴を狙われる危うさと切迫的な刺激に困惑するが、なにか打つ手があるわけでもなくただ我慢してそわそわ落ち着かなく腰を浮かす。気がつくとその刺激も情欲を煽り立てて、肛門のむずむずに悩めば悩むほど、子宮の鼓動が欲求を増した。

(ちが……う、これ、違うん……だからあつ!)

誰かになにかを言われたかのように、切羽詰まる子宮の昂りに戸惑う。

啄むような刺激を連打され困り果てた菊皺を捲り上げて、

「それだめつ、そこ……おおつ、んあつ!! はあああつ、くうつ、あ、んあううつ!」

触手の先が、中のほうにまでめり込んできた。焼けつくようにジンジンと痺れる熱が、肛門の周りだけでなく内側の腸内にまで割り込んで浅い部分を掻きほぐし、限界いっぱい

の歪んだ甘美を奏でた。

「あ、あああつ、もう、そつち……い、だ、出す……穴、なのにイ。弄つたり、入つたり……い、いいッ!! はひふううつ! もう、だ、め……なるつ。おああううつ!!」

触手が埋まり来ると排泄のための穴に便意を伴った異物感が膨れて、気がおかしくなりそうだ。抜け出ると今度は、意図しないのに排泄してしまったような感覚に苛まれ、恥ずかしくて情けなくて仕方ない。タップリと愛液が膣穴から溢れ返り、従兄弟を相手にした淫らな妄想が浮かんできそうになる。

「お尻を困らされて、また一段と発情が進んだようだな。もうこうなると、アリエルのペニスをその膣内に挿入<sup>いれ</sup>してもらいたくて仕方ないんじゃないか？」

気がつけばまた魔王が正面に立ち、媚びた惚け顔を晒して腰をくねらせるセレスティアの様を眺めていた。胸からも手が離され、その代わりに左右の房とも触手が先端に開いた口で乳首を甘噛みしながら、身体を房へ巻きつけ揉み続けている。

「アリ……エル、の、おちん……ちん……。んお、お、おふっ!」

想像しただけでじゅわつと蜜が溢れた。子宮が催促するように脈打ちを速める。

もう意地を張って強がる言葉も思い浮かばない。端からヨダレを垂らす口から、  
「あふ……。ん」

官能の吐息がネットリとこぼれ、ついトリスタンの股間辺りをうかがってしまふ。

「キミの大好きなアリエルはいまここにいない。それにもし来たとしても、彼女<sup>が</sup>はずでにキミを満足させる男根がない身体だ。だから……」

軽薄なクラスメイトの声色と、重厚な魔王の威厳ある声との間で言ったり来たりに言葉遣いを変えながら、トリスタンはゆつくりとズボンの前を開いた。

「我がその代わりとなつてやろう。我のこの逸物で、お前の欲望を満たすがいい、セレスティアよ！」

「——へあ……。ん、お、ああつ、お……。ん、ち……。ん……」

禍々しい瘴気を纏う、漆黒のローブの陰から姿を現した怒張に、驚き、そして感嘆の溜め息を漏らした。

端正な顔立ちをした細身の長身からは想像もつかない、赤銅色に充血した重量感タップリの太幹はゴツゴツと節くれ立ち、幾本もの青筋を浮き上がらせて激しく脈打っていた。

見事に弧を描いて急角度に屹立した先端には、カ리를大きく広げた亀頭が鈴口から湧き出る先走りの汁にまみれて怪しげに鈍い光を放つ。

男にはみなこんなものがついているのかと考えると虫酸が走るおぞましきなのに、何故か目が離せない。汚らわしいと思いつつも、細かい部分までつぶさに観察してしまう。

（イ、イヤ、こんなの、アリエルの……おちんちん、じゃ、ない。代わりになんか、ならない……。全然違う……。あ、ああ……。ん……。ああ……。）

もしこのまま欲望に従ってしまったら、彼への裏切りとなってしまう。

キスもエッチも、その他のなにもかも、初めてはあいつだつて決めてたのに。

もう胸も揉まれてしまった。淫らな姿を晒してしまった。

(もう、わたし……、穢れてる、から……。アリエルに、愛してもらおう……。資格……。ない)

「さあ無様に尻をこちらへ差し出すがいい。お前がいま一番欲しいものを与えてやろう」  
「へあ？ あ、く……。う……。そんな、の、いらな、ああつ!!」

少なくともそんなものはいまここにはない。しかしベッドの上でよろける身体を引き寄せられると、まるで求めるように陰部が蕩け乱れた股ぐらを撓わな尻房ごと差し出した形になつてしまった。

「やだ……。つて、言つて……。るのにつ!! あ、ああつ、だめつ、やめッ、ふあああつ!」

子宮の疼きがもう抑えられない。従兄弟のことを考えなくても、愛液は膣穴から収まることもなく流れ続けていた。目の前に迫ると怒張は一段と生々しく、不気味な形状を眼に焼きつける。ツンと生臭い吐き気を催す匂いを漂わせるそれを、

「遠慮せず、タップリと味わえ」

「はむんっ、あむ、ん……。ちゅば、じゆるる、あむん、んむ、んむ、んむむん」

セレスティアは自分から口にくわえ込んでしまった。

(ひううっ!! わ、わたしっ、なにをっ!! こんなっ、あ……。ああつ、いやあああつ!)

頬張った途端、口いっぱいに広がった生臭く饅えた風味に、朦朧とした意識が一瞬で我に返った。先っぽを口に含んだだけなのに、太い幹は口蓋を押し広げてさらにずぶずぶと奥へと潜り込んでくる。発情に熱く火照ったセレスティアの口の中よりもさらに熱帯びて、固い鉄の棒に分厚いゴムをコーティングしたような極太肉が絶え間なく脈打つ。先端から溢れ続ける先走りの汁に肉幹をうっすら覆う恥垢が溶けて、酸味と塩味が強い腐った味わいを舌に染み込ませてきた。

「んぐううつ、ひゃ、あ、ああつ！ ふおんな、のお、やら。んぐううつ!!」

いつだかなにかの罰ゲームで食べさせられた、ブツ切りのウナギをパセリ汁で煮込んだ恐ろしく不味い下町料理の食感を思い出した。

太い幹は中が硬いくせに表面は奇妙な柔らかさでぶにゅぶにゅと押し返してくる。先っぽから溢れ続けるヌラヌラとした液汁が幹の表面を覆い、気色悪く舌にへばりついてきて取れない。しかもこうしている間にも、腐ったような磯臭い匂いが口いっぱいに広がってきて、頭がどうにかなりそうだ。

(くう……、ああつ！ おちん……ちんッ。こんな、に、臭いッ。汚らわしいッ。やだつ、こ、こんなつ!! こんな、酷い、ものっ！)

アリエルのものも、こんなに汚らしくて気色悪いのだろうか？ だとしたら幻滅だ。こんな口のに唾えるのはもちろん、身体のだこにも触れさせたくない。

「んぐっ！ うふっ!! あぐ、うううっ！」

なのに不浄の勃起は、汚濁で染め上げるように口腔を万遍なく掻き乱す。

込み上げる吐き気に一段と嫌悪感が膨れ上がり、セレスティアの全身が総毛立つ。

いまずぐにこんな汚らしいものなんか、吐き捨てたい。

いやむしろ力一杯噛み切って、下劣な魔王に一矢報いてやろうか。

屈辱と刺激的な風味に涙と鼻水を垂れ流し、呻きながら心を奮い立たせるが。

じゅぽっ、じゅるっ、ちゅりちゅるちゅる、ずじゅじゅっ、ちゅば、れるれるれる！

唇が意に反して男根を締めつけるように吸いつき続ける。

舌が腐った味わいを堪能するように、亀頭の中からカリの溝まで万遍なくしゃぶり、裏

スジを重点的に刺激する。

「んっ、んぐ、んぐ、んぐぐ、ぐびびっ、ゴクンッ」

ドクドクと量を増して溢れて来るカウパーを唾液と混ざり合うように攪拌し、どろりと恥垢が溶け込んだその汚濁を、グビグビと喉が蠢いて飲み下す。

（な、なんでっ!? い、いやっ！ いやなのにつ!! ユリウスなんかのっ、魔王なんかの、

こんな汚いのをっ！ あ、ああっ、うそっ。身体ッ、止まらないっ!! 発情しちゃってる

からっ！ 身体、エッチになっちゃってるからっ。はしたないこと、止められないッ!!）

自然と高まった情欲だったら、いくら昂つても理性で抑えられるはず。けれど、催淫の



香気をタツプリと吸わされたのに加えて、ミミズ触手に嘔みつかれ乳首から注ぎ込まれた毒汁が、自制心ではどうにもならないほど強烈な発情をもたらしセレスティアの肉体を支配してしまっていた。

「へえ、随分と慣れた舌使いだね。竿吸い上げてくる勢いもとても気持ちいいよ。多分こういうことするの初めてだと思っただけ、もしかしてアリエルにやってやろうと思っただけ練習してた？」

「んうっ!? んぐ……うううっ! ふむああつ!!」

慌てて首を横に振ると亀頭がほつぺたの内側に当たって、その形に膨らむ。

いくらなんでも、好きな男の子のペニスを口でしゃぶりたいなんて妄想するわけがない。処女のうちからそんなことを考えていたら、それこそ救いようのない変態だ。

しかしその変態的な好意を、しかも好きでもない男の男根に実際にしてしまっている……。処女なのに……。なにを考えても自己嫌悪に陥る。

「へえ、それじゃぶつつけ本番でこのテクニクなんだ。最初から男を喜ばせるやり方わかつちやっつてるんだね。学園始まって以来の天才少女が、おちんぼ大好きな天性の淫乱ビッチとは驚いたよ」

「なん……れふっへ!? わ、わらひの、ろこが、いんらんんん!! くひつ、えぐう!」  
否定しても肯定しても貶められる。無駄とはわかっていても、抗議してしまう。その間

にも、唇は陰茎を放そうとせずにはやぶり続ける。

声に出しても口腔をいっぱいには占める怒張に邪魔されて、無様な呻きにはかならない。「では私も貴女の淫らさに応えなくてはならないなっ！」

一転しての重厚な魔王声。

祈るように心の中で唱えるセレスティアへと、トリスタンは腰を繰り出し始めた。

「んあっ！ うぎよきゅ、にやつ！！ おぶつ、あばああつ！ へんぬあ、こふお、すりゅなっ、ふえばつ！！ この……ッ！ ぶああッ！！」

じゅぼつ、ずぐつ、ずつば、ずつぶ、ぬぶぶつ！！ じゅぶんつ！

窄まった唇を捲り返すように極太が勢いよく出入りを繰り返し、口蓋を抉るように擦りたてて喉の奥を何度も突いてくる。

「どうだ、気持ちいいか？ ちまちまと舐めているよりよつぽどこちらのほうが、我の逸物を存分に堪能できるだろう！！」

「う……ぐうつ、きもひわりゆいつふえ、い……いつへるれ、ひよ！！ ば、ばふあつ！」  
 どれほど男根で口の中を陵辱されても、反抗的な言葉をくぐもつた声で吐きかけてくるセレスティアに、しかし魔王はますます歓喜に顔を綻ばせた。

「どれだけ威勢よく振る舞っても、お前がその口いっぱいには男のペニスを啜えている事實は変わらんぞ！！」



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**

# キルタイムコミュニケーション小説シリーズ あなたはどのタイプ?



ドキドキラブな  
ハーレム系ライトノベル!

**二次元  
ドリーム文庫**

サイズ:文庫

戦うヒロインが屈服されちゃう!  
かなり過激なライトノベル!

**二次元  
ドリームノベルズ**

サイズ:新書

盗版サイトは、読者の権利を侵害する行為です。違法な行為は、法的責任を負います。

日常に密着したエロス、リアルな  
舞台設定で送る官能小説レーベル!

**リアルドリーム文庫**

サイズ:文庫

フリーダム度120%!?  
ジャンルにとらわれないドキドキ★ラノベ!

**あとみっく文庫**

サイズ:文庫

詳しくはKTCの  
オフィシャルサイトにて!

キルタイム

検索



電子書籍版も各ダウンロードサイトにて続々配信中!!



あなたのキモチイをお手伝い!

# キルタイムのアダルトコミック誌!

業界唯一! エロラノベ&エロコミック満載!!



二次元ドリームマガジン

魔法、催眠、性転換…不思議Hコミック誌!



コミックアンリアル

フェチをテーマにツキ抜ける作品群!!



コミックプリズム

KTCといえば闘うヒロインアンソロ!



メガミクライシス

詳しくはKTCの  
公式サイトにて!

キルタイム

検索



書店、書籍通販サイトなどで好評発売中!  
※いずれも18歳未満の方は購入できません。



# コミックス同人誌版も発売中!

全国の同人誌ショップ、キルタイムコミュニケーション通販にて取り扱っております。

KTC サイト <http://ktcom.jp/>



title:

## ノブナガ繚乱!

lineup:

『明智の策略』

トキサナ

『DSの流儀』

chaccu

『生徒会長前哨戦?』

天道まさえ

title:

## 発情期なアダム

lineup:

『いつもの学園生活』 天道まさえ

『天使の誘惑』 ウメ吉

『ELECTRIC LOVE』 空木次葉



## 電子書籍版もあります!

各種ダウンロードサイトにて発売中! ※18歳未満の方は購入できません。



**ヴァルキリー**

<http://www.comic- Valkyrie.com/>

**cranberry**

<http://www.cran-berry.com/>

**mille-feuille**

<http://www.mille-feuille.jp/>

**モバイル二次元ドリーム**

<http://www.2d-dream.jp/>

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!